九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[126]語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2544112

出版情報：語文研究. 126, 2018-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

佐藤大介・高橋陽一・菱岡憲司・青柳周一　編

東北文化資料叢書第十一集
『小津久足　陸奥日記』

本書は、江戸時代後期の商人で、旺盛な文芸活動を行なった小津久足の手による紀行文『陸奥日記』の全文を翻刻した史料集である。本書の構成は以下の通り。

小津久足『陸奥日記』刊行にあたって　佐藤大介

［解説］

『陸奥日記』の位相　菱岡憲司

「東北紀行」とは何か　板坂耀子

『陸奥日記』の東北旅行史的特徴　高橋陽一

［論説］

一九世紀の商人・旅行者としての小津久足　青柳周一

［史料］

小津久足『陸奥日記』

凡例

上巻

中巻

下巻

小津久足は伊勢松坂の豪商で、その文事には紀行・詠歌・蔵書・小説受容の四つの柱が見出される。本書で紹介する『陸奥日記』は、彼の紀行文の中でも白眉とされ、また江戸時代の紀行文学全体を通して見た場合でも、貝原益軒や橘南谿らの作品と並ぶ、代表的なものとして位置づけられている。

『陸奥日記』では、正確な事実の記載という主知を旨としつつも、旅先での見聞に触発されて歯に衣着せぬ「私」の心情を吐露するという主情も描かれており、中世までの主情と近世よりの主知という、新旧二つの特徴を兼ね備えた紀行文として完成されている。江戸の紀行文の代表作たる所以である。

なお本書の刊行は、二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災が契機となっている。久足が『陸奥日記』でたどった旅路の多くは、被災で失われてしまった往時の姿を、現在そして未来へと伝えるものであり、またかつてそこに人々の暮らしがあったという、まぎれもない証でもある。本書を被災した東北の地から発信する意義は、まことに大きいと言えよう。

（平成三十年三月　東北大学大学院文学研究科東北文化研究室　B5判　一九四頁）

筑紫平安文学会　著

歌合・定数歌全釈叢書二十『好忠百首全釈』

本書は、平安時代の歌人・曾禰好忠による『好忠集』所載の、いわゆる「好忠百首」（一〇三首）の注釈である。あわせて、解説と附録も収められる。本書の構成は以下の通り。

凡例
全釈
解説
一　曾禰好忠――その人生と歌――
二　資経本『曾禰好忠集』の本文について
三　〈好忠百首〉における『万葉集』受容　附『万葉集』古点の成立時期臆断
四　〈好忠百首〉春夏秋冬恋部の表現――『古今集』『後撰集』の受容――
五　〈好忠百首〉の表現摂取――歌合・私家集との関わりを中心に――
六　〈順百首〉に見られる〈好忠百首〉の享受と展開
七　〈恵慶百首〉に見られる〈好忠百首〉の影響について
八　不遇と老いの歌――〈好忠百首〉とその周辺――
附録
一　〈好忠百首〉〈順百首〉〈恵慶百首〉本文対照
二　主要参考文献一覧
三　〈好忠百首〉各句索引
あとがき

中古三十六歌仙の一人でもある好忠の私家集である『好忠集』（『曾丹集』とも）は、「毎月集」、「好忠百首」、「つらね歌」、「源順百首」、後人による増補歌という構成になっており、なかでも「好忠百首」歌は、その後継承される「百首歌」形式の嚆矢と考えられている。

注釈本文には、校異・通釈・語釈・別出・考察が示されるが、とくに考察では一首に二頁近くが費やされるほどの労作である。

本書の底本は冷泉家時雨亭文庫蔵の「資経本」。これまでの『好忠集』注釈は「天理本」や「書陵部本」が底本とされており、「資経本」を底本とする注釈ははじめてである。しかし、それぞれの異同を精査すると、従来の分類とは異なる本文系統が浮かび上がり、「資経本」を使用する価値は十分に認められよう。そこには、右に述べた『好忠集』の五部構成が、合集される以前に別個の流布過程を経たことも想定できることが述べられる。

また、好忠伝記として、百首が同集に収録される「順百首」の詠者・源順に向けて詠作されただけでなく、当時の歌壇に広く流布することを望む意図があり、じっさいに大きな影響

をもたらしたこと、歌自体については『万葉集』『古今集』『後撰集』から享受するところが多いこと、さらに「順百首」や「恵慶百首」といった百首歌への影響の様相などについて、解説には本集を理解するうえで重要かつ新鮮な論考が豊富に収められる。

（平成三十年三月　風間書房　A5判　四〇四頁　九五〇〇円＋税）

武田政子　著　狩野啓子・岩井眞實　編
『芝居小屋から　武田政子の博多演劇史』

本書は、武田政子氏の遺稿を編者である狩野啓子、岩井眞實両氏がまとめられ、刊行されたものである。

編者序文
はじめに
第一章　わが家と芝居
第二章　武田家と劇場
第三章　わたしの芝居見物
解説
刊行によせて
編者あとがき

祖父の代から博多の演劇に関わってきた武田家に生まれた著者である武田政子氏は、明治以降の博多の芝居について十冊を超えるノートに記しており、その内容は、雑誌『歌舞伎研究と批評』（歌舞伎学会）に「博多興行史　明治篇」として一部まとめられたが、ここで扱われた範囲は武田氏の生まれる前の時代であり、武田氏の見聞きした部分を含んではいない。今回、その後の残る原稿を狩野啓子、岩井眞實両氏が編集し刊行された。武田氏のノートの記述を重視し、ほとんど手を加えない編集方針をとっており、記述の重複も飛躍も加筆せずに最小限の監修にとどめている。第一章では祖父である武田与吉の一代記として武田家と芝居との関係を記し、第二章では、大正初期までの寿座・明治座、大正以降の九州劇場・大博劇場という博多の興行史を語るうえで重要である博多の劇場史を記し、その劇場史と武田家が人間くさいレベルで関係を持っていたことを示す、博多興行裏面史といった趣を持つものとなっている。第三章では、大正五年から大正十一年頃までの武田政子氏による観劇記録となっており、当時少女であった著者の先入観無しの観察が記されており、時代の証言と言えるものになっている。

（平成三十年六月　海鳥社　四六判　二四六頁　二五〇〇円＋税）

飯倉洋一・盛田帝子　編
『文化史のなかの光格天皇：朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』

本書は、天皇および堂上歌壇や朝廷文化とその拡がりについて、様々な研究者によって論じられた論文集である。本書の構成は以下の通り。なお、各論文の執筆者については紙幅の都合上省略した。

序言
緒論　光格天皇をどうとらえるか
第一部　近世歌壇における天皇公家
第二部　朝廷をめぐる学芸・出版
第三部　光格天皇・妙法院宮の文芸交流
あとがき
執筆者一覧

光格天皇は明和八年（一七七一）生、天保十一年（一八四〇）没。享年、七十歳。一七一九年から一八一七年の間在位した江戸時代後期の天皇である。実父典仁親王に太上天皇の尊号を宣下しようとし、江戸幕府によって阻まれた尊号事件のほか、近年では生前退位をした最後の天皇として注目が集まっている。また、博学として知られ、作詩・音楽への嗜みが深かった。朝儀の復興に尽力し、在位の間に岩清水社・賀茂社の臨時祭の再興を実現した。

光格天皇についての研究は、本書の緒論を執筆した藤田覚氏『幕末の天皇』（講談社選書メチエ、一九九四年）以来、歴史学の分野では成果が上がっているものの、その一方で文化的側面について不明な点が多い。また、同時に江戸時代における天皇周辺を含む堂上歌壇の研究においても、前期に偏っており後期の天皇の文化史的意義についてはまだほとんど検討がなされていない。

本書の編者である盛田氏等は、光格天皇の時代を幾つかの観点から文化史的に重要なものであると考えている。まず、光格天皇の時代に、歌壇において地下の和歌・歌論が堂上歌壇・歌人に影響を与え始めるという大きな転換期を迎えたということ。次に、天明の大火以後、寛政二年（一七九〇）に新たに内裏が造営され、光格天皇の意向によって朝廷における朝儀再興が行われたことなどが挙げられる。また、光格天皇の時代を検討するにあたって、堂上歌壇を磁場とする人的交流が重要な意味を持つことも合わせて指摘する。こうした問題意識に基づいて、様々な研究者がそれぞれの観点から論じている。

これまで等閑視されてきた天皇の文化を歴史的に研究することに対して、盛田氏は、本書の諸論考は、江戸時代における天皇の文化的存在意義の大きさや、近代天皇制における文

化的要素へのつながりを考える上で大きな役割を果たすであろうと展望を述べている。

（平成三十年六月　勉誠出版　Ａ５判　四〇八頁　八〇〇〇円＋税）